

<前回>オリエンテーション

前期：キリスト教と近代的知

後期：方法論的考察と聖書の社会論

オリエンテーション

I：象徴・言語・システム

1. 象徴・言語 1
2. 象徴・言語 2
3. 象徴・言語 3
4. システム・宗教

II：レトリック・メタファー

1. レトリック・メタファー
2. メタファー・モデル
3. イエスの譬え

III：コミュニケーション・解釈

1. 伝統と意味の地平
2. 多元性と対話
3. イデオロギーとユートピア

11/30

12/7

12/14

IV：宗教と文化——構造と動態

1/18

I：象徴・言語・システム

1. 象徴・言語 1
2. 象徴・言語 2
3. 象徴・言語 3
4. システムと宗教

II：レトリック・メタファー

1. レトリック・メタファー
 - (0) 聖書からの具体例（ヨハネ 6:22～59）
 - (1) 言語の諸レベルにおける隠喩の位置
 - (2) 旧修辞学から新しい隠喩論へ
- 1) 伝統的隠喩論とその問題性
- 2) 新しい隠喩論の試み
- (3) 隠喩の指示の二重性と実在の開示

2. メタファー・モデル

<隠喩・モデル>

1. 言語世界／心的世界／実在世界（日常性・生活世界など）／宗教言語の指示世界における隠喩、モデルの位置づけ。

経験／隠喩／概念：

記号／意味／指示：

語／隠喩／テキスト：言語の諸階層 1 → 連辞

隠喩／モデル：言語の諸階層 2 → 範列

↓

- ・ syntagm（連辞）〈metaphor-narrative〉→パロール→諸要素の結合規則とその構造線的、連鎖的な言述順序。テキストは全体として連辞と見なされる。連辞内の諸要素が、前後の諸要素との関係でそれぞれの価値を獲得する。

・ paradigm (範列) <metaphor-model> → ラング

特定の構造によって特徴付けられた体系内の他の諸要素との関係。テキストはこの体系に属する諸要素の部分的な表出。所与の体系に所属する諸要素の集積が範列。

(1) 「神のモデル」とは何か？

2. モデル：隠喩を構成要素として成立する上位の構造体。隠喩から構成されるの範列的秩序。モデルは、根底的隠喩 (root metaphor) を核として、その周りに類似した隠喩を結合している。一定の隠喩表現を核としてその回りに構成された隣接する隠喩群・隠喩群のネットワーク。

(2) モデルの複数性と相補性

3. モデルの特性として

- ①モデルの複数性：現象学的記述→理論的に<存在論的に>相互に関連づける。
- ②モデルの複数性→神経験の複数性
- ③キリスト教の伝統的な「神のモデル」の複数性と基本的性格 (男性モデル)

(3) 「神のモデル」の選択・適切性の基準

4. ティリッヒの「相関の方法」:

「状況—メッセージ」「問い—答え」(コミュニケーション・フィールド)

現在と過去・伝統の両極

↓

状況適合性と自己同一性という二つの課題:

- ①その時代の宗教的問いに適合したものであること
- ②また同時にキリスト教の伝統との連続性を満たし得るものであること

↓

モデルの適切性の基準

現代の歴史的思想的状況にふさわしいキリスト教的モデルとは何か。

エコ・フェミニズム (マクフェイグ、リューサー)

(4) : 現代神学の状況と「神のモデル」の選択

5. McFague

<状況> → 現代の要求する新しい感受性 (the new sensibility) (16)

A Holistic View of Reality/Responsibility for nuclear knowledge/
consciousness of the constructive character of all human activities)

<聖書・伝統との連続性>

キリスト教神学の源泉: 「イエスの物語」 (the story of Jesus)

(5) 解釈から倫理へ

6. Ricoeur

想像力・構想力 (出来事) から倫理へ。宗教哲学の可能性。

構想力とは人間存在の全体性の基礎をなす。

カント、ハイデgger、ティリッヒ、波多野、リクール、
マクフェイグ、シュヴァイカー。

3. イエスの譬え

(1) イエスの宗教運動と譬え

1. イエスの宗教運動 → 「神の国」運動・「神の国」の論理・秩序

→ 既存の秩序 (「敵—味方」の二分法) を批判し相対化する。

別の秩序をイメージ化する → 開かれた共食

S. Ashina

罪人、女性、子供

2. 新しい隣人理解（自己理解）の現実化としての「神の国」
隠喩としての神の国
3. これまでの譬え解釈の概要
 - ・ 譬えは、教育的な役割。教義を初心者向けにわかりやすく説明する。
→ 教義を読み取る。アレゴリカルな解釈・教義的解釈。
 - ・ 譬えは、イエスの宗教運動の基礎資料。イエスに帰れ。イエスの意図と最初の聴衆の理解を再構成する。歴史的解釈・近代聖書学。
4. エレミアスの譬え研究：イエスの状況と原始教会の状況との比較
 - ・ 結論：アレゴリカルな解釈は新約聖書自体に遡る
マルコ福音書の「種まきの譬え」（マルコ福音書の譬え論）
種＝神の言葉
鳥＝サタン
石だらけの土地＝艱難や迫害にすぐつまづく人
茨の中＝思い煩い・誘惑・欲望に心をふさがれている人
良い土地＝神の言葉を受け入れ、実を結ぶ人
 - ・ アレゴリカルな解釈の本質と問題性
 - a. 「共同体の外部と内部の区別」は譬え解釈に次のような役割を与える。
 1. 外部向けの教えの形式→秘密の教え＝奥義を外部の者から守る
 2. 教育
 - b. 隠喩の代置理論(Substitution Theory)＝古い隠喩理論：暗号と暗号解読

<種まきの譬え（マルコ福音書）>

4:1 イエスは、再び湖のほとりで教え始められた。おびただしい群衆が、そばに集まって来た。そこで、イエスは舟に乗って腰を下ろし、湖の上におられたが、群衆は皆、湖畔にいた。2 イエスはたとえでいろいろと教えられ、その中で次のように言われた。

3 「よく聞きなさい。種を蒔く人が種蒔きに出て行った。4 蒔いている間に、ある種は道端に落ち、鳥が来て食べてしまった。5 ほかの種は、石だらけで土の少ない所に落ち、そこは土が浅いのですぐ芽を出した。6 しかし、日が昇ると焼けて、根がないために枯れてしまった。7 ほかの種は茨の中に落ちた。すると茨が伸びて覆いふさいだので、実を結ばなかった。8 また、ほかの種は良い土地に落ち、芽生え、育って実を結び、あるものは三十倍、あるものは六十倍、あるものは百倍にもなった。」9 そして、「聞く耳のある者は聞きなさい」と言われた。

10 イエスがひとりになられたとき、十二人と一緒にイエスの周りにいた人たちがたとえについて尋ねた。11 そこで、イエスは言われた。「あなたがたには神の国の秘密が打ち明けられているが、外の人々には、すべてがたとえで示される。12 それは、／『彼らが見るには見るが、認めず、／聞くには聞くが、理解できず、／こうして、立ち帰って赦されることがない』／ようになるためである。」13 また、イエスは言われた。「このたとえが分からないのか。では、どうしてほかのたとえが理解できるだろうか。

14 種を蒔く人は、神の言葉を蒔くのである。15 道端のものとは、こういう人たちである。そこに御言葉が蒔かれ、それを聞いても、すぐにサタンが来て、彼らに蒔かれた御言葉を奪い去る。16 石だらけの所に蒔かれるものとは、こういう人たちである。御言葉を聞くとすぐ喜んで受け入れるが、17 自分には根がないので、しばらくは続いても、後で御言葉のために艱難や迫害が起こると、すぐにつまづいてしまう。18 また、ほかの人たちは茨の中に蒔かれるものである。この人たちは御言葉を聞くが、19 この世の思い煩いや富の誘惑、その他いろいろな欲望が心に入り込み、御言葉を覆いふさいで実らない。20 良

い土地に蒔かれたものとは、御言葉を聞いて受け入れる人たちであり、ある者は三十倍、ある者は六十倍、ある者は百倍の実を結ぶのである。」

(2) 近代的な譬え解釈 (ユリヒャー以降)

5. 20 世紀の譬え研究はごく最近まで、聖書学全体の動向を反映して、ユリヒャーの示した議論の内の歴史性の議論の線上で展開してきた。

Rudolf Bultmann, *Die Geschichte der synoptischen Tradition*, Göttingen, 1979 (1921).

C.H.Dodd, *The Parable of the Kingdom*, New York, 1961 (1935).

Joachim Jeremias, *Die Gleichnisse Jesu*, Göttingen, 1984 (1947).

- ・アレゴリカルな解釈からの決別 → 譬えの歴史性と文学性
- ・隠喩の代置理論、アリストテレスの修辞学 → 文学性の理解における限界
- ・歴史性への過度の集中、歴史への偏重
文学的言語的な分類の問題は歴史的社会学の問題設定に従属している。
- ・エレミアス：新約聖書テキストはもっぱらその歴史的原初形態 (イエス自身の言葉) の再構成のための資料として理解されている。
- ・イエスの譬えはアリストテレス的な修辞学とは別の法則性の基づいている。
新しい隠喩理論の必要性

6. エレミアス以降、新しい言語論・文芸批評学の影響

1. 文学性の復権、反歴史主義：構造主義的譬え解釈
2. 文学性と歴史性とのバランスの回復から思想へ

↓

解釈学的プロセスに基づく譬え解釈

これは歴史概念と言語概念との本格的な問い直しを要求する。

7. **Adolf Jülicher**, *Die Gleichnisreden Jesu. Zwei Teile in einem Band*, Darmstadt

1976 (1888 / 1899)

Erster Teil: Die Gleichnisreden Jesu im Allgemeinen

Zweiter Teil: Auslegung der Gleichnisreden der drei ersten Evangelien

Echtheit / Wesen / Zweck / Wert

Kampf gegen die allegorisierende Auslegung (50)

Allegorie: ein Satzgefüge, das eine zusammenhängende Reihe von der Deutung bedürftigen Begriffen bietet. Die sprachliche Vorstufe der Allegorie ist Metapher.

Metapher: das Grundelement uneigentlicher Rede cf. Vergleichung

das Gleichnis: die auf ein Satz Ganzes erweiterte Vergleichung (58)

Die Echtheit der evangelischen Parabeln ist keine absolute.

fast ohne Ausnahme haben sie einen echten, auf Jesus selber zurückgehenden Kern. (11)

sie zu dem Sichersten und Bestüberlieferten gehören, was wir an Reden Jesu noch besitzen. (24)

der Begriff des Vergleichens, Verähnlichens das Fundament des Wortes bildet. (36)

nicht bloße Begriff, sondern ein vollständiger Satz

Maschal: eine vergleichende Rede und insofern eine rhetorische Kunstform (37)

Aehnlichkeit zwischen dem Verhältnis der Begriffe der einen Seite und dem der Begriffe der andern Seite. (70) $a:b = \alpha : \beta$ (69)

analogia proportionalitatis (Aristoteles. Rhetorik, Logik, Ontologie)

Das Gleichnis will, wie die Vergleichung ein Wort, so einen Gedanken durch ein homoion beleuchten, daher man auch bei ihm nur von einem tertium comparationis redet. (70)

Erkenntnishilfe: Sache / tertium comparationis / Bild

（3）譬え解釈との関わりにおける聖書学の現状

8. 近代聖書学の成立の意義：教義学より聖書学の自立

アレゴリカルな解釈からテキストの歴史的言語的分析へ

↓

9. 問題性：

1) テキストの思想性への接近困難あるいは既存の思想への短絡

2) 歴史性、文学性、思想性の分裂状況

聖書学と聖書神学の分裂、現代において聖書神学は可能か

3) 聖書学の諸方法の細分化・専門化。

方法論上の混乱、自分の立っている位置が見えない。

(1) 旧約聖書と新約聖書 → キリスト教の自己理解の混乱、聖書神学の試み

(2) イエスとパウロ、イエスの宗教運動の継承に関する多様性とパウロ的伝統

(3) 新約聖書と教父学・キリスト教古代史

田川建三『書物としての新約聖書』（勁草書房）

新約聖書概論の中の「序説」「補遺」（新約聖書概説序説）

↓

聖書テキストとは何であり、その解釈・理解はどのようにして可能になるのか？

聖書学の方法論を再考する必要性

↓

歴史性、文学性、思想性を、聖書解釈の中に位置づけ直し、統合する必要性。

（4）譬え解釈の解釈学的プロセス

芦名定道「宗教的認識と新しい存在」『哲学研究』第 559 号、京都哲学会 1993 年。

「キリスト教信仰と宗教言語」『哲学研究』第 568 号、京都哲学会 1999 年。

<譬え解釈の手順>

0) 予備的考察（文学的・歴史的・思想的）

1) 歴史性

2) 文学性：構造分析 / 譬えの文学的機能・効果 / 読解プロセスの再現

3) 思想性・思想理解：神の国はいかなる仕方で現前するか、何をもちたすか。

<構造分析の階層性>

- ・ 単一の譬えの構造
- ・ 譬え群の構造
- ・ 新約聖書の文書単位の構造
- ・ 新約聖書の構造
- ・ 聖書の構造

<タラントの譬え：マタイ 25.14-30 >

14 「天の国はまた次のようにたとえられる。ある人が旅行に出かけるとき、僕たちを呼んで、自分の財産を預けた。15 それぞれの力に応じて、一人には五タラント、一人には二タラント、もう一人には一タラントを預けて旅に出かけた。早速、16 五タラント預かった者は出て行き、それで商売をして、ほかに五タラントをもうけた。17 同じように、二タラント預かった者も、ほかに二タラントをもうけた。18 しかし、一タラント預かった者は、出て行って穴を掘り、主人の金を隠しておいた。19 さて、か

なり日がたってから、僕たちの主人が帰って来て、彼らと清算を始めた。20 まず、五タラントン預かった者が進み出て、ほかの五タラントンを差し出して言った。『御主人様、五タラントンお預けになりましたが、御覧ください。ほかに五タラントンもうけました。』21 主人は言った。『忠実な良い僕だ。よくやった。お前は少しのものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ。』22 次に、二タラントン預かった者も進み出て言った。『御主人様、二タラントンお預けになりましたが、御覧ください。ほかに二タラントンもうけました。』23 主人は言った。『忠実な良い僕だ。よくやった。お前は少しのものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ。』24 ところで、一タラントン預かった者も進み出て言った。『御主人様、あなたは蒔かない所から刈り取り、散らさない所からかき集められる厳しい方だと知っていたので、25 恐ろしくなり、出かけて行って、あなたのタラントンを地の中に隠しておきました。御覧ください。これがあなたのお金です。』26 主人は答えた。『怠け者の悪い僕だ。わたしが蒔かない所から刈り取り、散らさない所からかき集めることを知っていたのか。27 それなら、わたしの金を銀行に入れておくべきであった。そうしておけば、帰って来たとき、利息付きで返してもらえたのに。28 さあ、そのタラントンをこの男から取り上げて、十タラントン持っている者に与えよ。29 だれでも持っている人は更に与えられて豊かになるが、持っていない人は持っているものまでも取り上げられる。30 この役に立たない僕を外の暗闇に追い出せ。そこで泣きわめいて歯ざしりするだろう。』

<ムナの譬え：ルカ 19.11-27 >

11 人々がこれらのことに聞き入っているとき、イエスは更に一つのたとえを話された。エルサレムに近づいておられ、それに、人々が神の国はすぐにも現れるものと思っていたからである。12 イエスは言われた。「ある立派な家柄の人が、王の位を受けて帰るために、遠い国へ旅立つことになった。13 そこで彼は、十人の僕を呼んで十ムナの金を渡し、『わたしが帰って来るまで、これで商売をしなさい』と言った。14 しかし、国民は彼を憎んでいたもので、後から使者を送り、『我々はこの人を王にいただきたくない』と言わせた。15 さて、彼は王の位を受けて帰って来ると、金を渡しておいた僕を呼んで来させ、どれだけ利益を上げたかを知ろうとした。16 最初の者が進み出て、『御主人様、あなたの一ムナで十ムナもうけました』と言った。17 主人は言った。『良い僕だ。よくやった。お前はごく小さな事に忠実だったから、十の町の支配権を授けよう。』18 二番目の者が来て、『御主人様、あなたの一ムナで五ムナ稼ぎました』と言った。19 主人は、『お前は五つの町を治めよ』と言った。20 また、ほかの者が来て言った。『御主人様、これがあなたの一ムナです。布に包んでしまっておきました。21 あなたは預けないものも取り立て、蒔かないものも刈り取られる厳しい方なので、恐ろしかったのです。』22 主人は言った。『悪い僕だ。その言葉のゆえにお前を裁こう。わたしが預けなかったものも取り立て、蒔かなかったものも刈り取る厳しい人間だと知っていたのか。23 ではなぜ、わたしの金を銀行に預けなかったのか。そうしておけば、帰って来たとき、利息付きでそれを受け取れたのに。』24 そして、そばに立っていた人々に言った。『その一ムナをこの男から取り上げて、十ムナ持っている者に与えよ。』25 僕たちが、『御主人様、あの人は既に十ムナ持っています』と言うと、26 主人は言った。『言うておくが、だれでも持っている人は、更に与えられるが、持っていない人は、持っているものまでも取り上げられる。27 ところで、わたしが王になるのを望まなかったあの敵どもを、ここに引き出して、わたしの目の前で打ち殺せ。』

<解釈の試み 1 >

◆予備的考察

S. Ashina

- 1) マタイ 13.1-51：種を蒔く人の譬え、天の国の譬え、譬え論 群衆と弟子
毒麦の譬え、からし種とパン種の譬え
13.1-23,31-35 はマルコ、ルカと並行箇所
- | | |
|-----------------------|-----------------|
| 18.10-14:迷い出た羊の譬え（ルカ） | 弟子 |
| 21-35:仲間を赦さない家来の譬え | 弟子・ペテロ |
| 20.1-16:ぶどう園の労働者の譬え | 群衆、弟子、ファリサイ派 |
| 21.28-32:二人の息子の譬え | エルサレム、群衆、弟子、敵対者 |
| 33-44:ぶどう園と農夫の譬え | エルサレム、群衆、弟子、敵対者 |
| 22.1-14:婚宴の譬え（ルカ） | エルサレム、群衆、弟子、敵対者 |
| 24.45-51:忠実な僕と悪い僕（ルカ） | オリーブ山・弟子 |
| 25.1-13:十人のおとめの譬え | オリーブ山・弟子 |
| 14-30:タラントの譬え（ルカ） | オリーブ山・弟子 |
- 2) 教えの形式：群衆に対する教え / 弟子に対する教え / 論争の場面
内容：神の国・裁きの教え、終末に備えた勧告（目を覚ましていなさい）
終末時の人間の二つのグループへの分離（対照的な二つのグループ）
- 3) 本文批判（解釈すべきテキストの範囲）
25.14a+14b-27+28+29-30
28 の個別的命令が 29 で普遍化されている
30：永遠の罰を下す再臨のキリスト（キリスト論的解釈）
- 4) 譬えのテーマ：神の国

◆考察

1) 歴史性

1. マタイ福音書におけるこの譬えの位置づけ
マタイにおける譬えの機能、教え・勧告・論争
2. ルカの並行記事との比較
 - ・ マタイとルカに共通している点から Q 文書に由来すると思われる。
佐藤研 「Q 文書」(『現代聖書講座第 2 巻』日本基督教団出版局) p.276f.
マタイの方がルカよりも譬えの原型を保存している。
3. 譬えに組み込まれたあるいはその背後にあるテキストのレパートリー
 - ・ 1 タラント (= デナリオン) = 6,000 ドラクメ
1 デナリオン：一日の賃金
ムナ：100 ドラクメ
 - ・ 主人－僕、銀行：古代地中海の商業活動→ユダヤの大商人（都市支配階層）
極端な貧富の差、階層格差
諸対立：都市と農村、大土地所有者と小作・農業労働者
笠原義久「1 世紀の東地中海世界の社会構造」(『現代聖書講座第 1 巻』)

2) 文学性

・ 構造：

- 1) 14a
14b-15、16-18、19-27:19 / 20-21 / 22-23 / 24-27
28
29
30
- 2) D=master
R1=5+2 talent servants

R2=1 talent servant

Determiner / Respondent

the Ten Maidens

cf. comic / tragic : Laborers in the Vineyard, Great Supper,
Good Samaritan, Prodigal

・聴衆における聴聞プロセスの再現

1.弟子は？ 敵対者は？ 群衆は？) 2.原始教団のメンバーは？

・読解プロセス

など、違和感！ → 問いの提示、探求、自己の存在様態への反省

我々現代人にとって終末の現実性とは？

このような終末との関わりにある現代人=我々とは何者か

3) 思想性 (思想理解)

1.14-27:神の国とは？ 大商人としての神！

神の国はあらゆる期待を超えている、その意味で現実と徹底的なコントラストにある。

2.14-30:この譬えは原始教団の状況 (終末の遅延) を反映したものか？

伝道する教会の状況、終末の遅延

3.終末を意識することの意義？

現実をトータルに批判する視点の獲得 (現実の相対化)

限られた有限性における生の価値

適切な行動・応答の要求、危機としての神の国の到来

< 解釈の試み 2 >

10. **Paul Ricoeur**, "Listening to the Parables of Jesus."

What makes sense is not the situation as such, but, as a recent critique has shown, it is the plot, it is the structure of the drama, its composition, its culmination, its denouement. (240)

a network of intersignification, to understand each one in the light of the other (242)

Mt.13:45-46,47-49

Three critical moments emerge: *finding* the treasure, *selling* everything else, *buying* the field (240)

Event (the newness) / Reversal / Doing

the event comes as a gift. (241)

The power of this language is that it abides to the end within the tension created by the images.

think through the richness of the images / metaphor (242)

The challenge to the conventional wisdom is at the same time a way of life. We are first disoriented before being reoriented.

reorientation by disorientation, extravagance

this dramatization is both paradoxical and hyperbolic. (244)

surprising strategy of discourse.

To listen to the Parables of Jesus, it seems to me, is to let one's imagination be opened to the new possibilities disclosed by the extravagance of these short dramas. If we look at the Parables as at a word addressed first to our imagination rather than to our will, we shall not be tempted to reduce them to mere didactic devices, to moralizing allegories. We will let their poetic power display itself within us.

poetic power of Parables / the Event / Reversal / Decision (moral) (245)

cf. Crossan, McFague

11. **J.D.Crossan**, *In Parables. the challenge of the historical Jesus*, Harper & Row, 1973.

S. Ashina

Parables of Advent : The Sower, The Mustard Seed

Parables of Reversal : The Good Samaritan

Parables of Action : The Wicked Husbandmen, The Servant Parables

Group A: The Doorkeeper, The Overseer, The Talents, The Throne Claimant

Group B: The Unmerciful Servant, The Servant's Reward, The Unjust

Steward, The Wicked Husbandmen, The Vineyard Workers

In Group A normalcy of world was reflected in harmony of structure and homogeneity of development. In Group B the questioning of this normalcy is reflected in the total lack of structural homogeneity. (116)

The parables of action all challenge one to life and action in response to the Kingdom's advent. But the Servant parable introduces a very disturbing note into all this. The temporality of the Kingdom appears in the three simultaneous modes of advent, reversal, and action. But as advent takes priority over reversal, so does this latter over action. In the eight parables of the Servant cluster a theme is presented in ordered normalcy and then is just as carefully reversed and shattered. Like a wise and prudent servant calculating what he must do in the critical reckoning to which his master summons him, one must be ready and willing to respond in life and action to the eschatological advent of God. But, unfortunately, the eschatological advent of God will always be precisely that for which wise and prudent readiness is impossible because it shatters also our wisdom and prudence. (119f.)

<マタイ>

13:44 「天の国は次のようにたとえられる。畑に宝が隠されている。見つけた人は、そのまま隠しておき、喜びながら帰り、持ち物をすっかり売り払って、その畑を買う。45 また、天の国は次のようにたとえられる。商人が良い真珠を探している。46 高価な真珠を一つ見つけると、出かけて行って持ち物をすっかり売り払い、それを買う。47 また、天の国は次のようにたとえられる。網が湖に投げ降ろされ、いろいろな魚を集める。48 網がいっぱいになると、人々は岸に引き上げ、座って、良いものは器に入れ、悪いものは投げ捨てる。49 世の終わりにもそうなる。天使たちが来て、正しい人々の中にいる悪い子どもをより分け、50 燃え盛る炉の中に投げ込むのである。悪い子どもは、そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう。」

12. イエスの譬え → 神の国の現実の開示（第二度の指示）

- ・言葉の出来事：発見・驚き・喜び → 存在（構想力）の転換 → 実践
- ・受容されていることの認知（受容されていることを受容すること）

acceptance of being accepted : ティリッヒ

自己との和解

↓

開かれた食卓、拡大され更新された家族（神の家族）

<参考文献>

1. Peter Stuhlmacher, *Vom Verstehen des Neuen Testaments. Eine Hermeneutik*. Göttingen, 1986².
2. G.R. Evans, *The Language and Logic of The Bible. The Road to Reformation*, Cambridge Univ. Press, 1985.
 , *The Language and Logic of The Bible. The earlier Middle Ages*, Cambridge, 1984.
3. Gerhard Ebeling: *Evangelische Evangelienauslegung*, Tübingen 1991³ (1941).
4. Ernst Troeltsch, " Ueber historische und dogmatische Methode in der Theologie," 1900 (GS.2).
5. Wolfhart Pannenberg, " Heilsgeschichte und Geschichte," 1959,
 , " Die Krise des Schriftprinzips", 1962

- in: *Grundfragen systematischer Theologie 1*, Göttingen, 1979³.
6. Paul Ricoeur: *The Reality of Historical Past* (The Aquinas Lecture. 1984),
Marquette Univ. Press. 1984.
 7. Eduard Schweizer, *Luke. A Challenge to Present Theology*, John Knox Press, 1982.
 8. Adolf Jülicher, *Die Gleichnisreden Jesu. Zwei Teile in einem Band*, Darmstadt
1976 (1888 / 1899)
 9. Joachim Jeremias: *Die Gleichnisse Jesu*, Göttingen, 1984¹⁰ (1947)
 10. Walther von Loewenich: *Luther als Ausleger der Synoptiker*, München, 1954.
 11. Rudolf Bultmann, *Die Geschichte der synoptischen Tradition*, Göttingen, 1979 (1921).
 12. C.H. Dodd, *The Parable of the Kingdom*, New York, 1961 (1935).
 13. Eta Linneman, *Gleichnisse Jesu*, Göttingen, 1978 (1961).
 14. Eberhard Jüngel, *Paulus und Jesus*, Tübingen, 1979 (1962).
 15. Archibald M. Hunter, *The Parables Then and Now*, Westminster Press, 1971.
 16. Robert H. Stein, *An Introduction to the Parables of Jesus*, The Westminster Press, 1981.
 17. Robert W. Funk, *Language, Hermeneutic, and Word of God*, New York, 1966.
, *Parables and Presence*, Fortress, 1982.
The Good Samaritan as Metaphor
 18. Dan Otto Via, *The Parables. Their Literary and Existential Dimension*, Fortress, 1967.
 19. John Diminic Crossan, *In Parable. The Challenge for the Historical Jesus*, New York, 1973.
 20. Amos N. Wilder, "An Experimental Journal for Biblical Criticism. An Introduction,"
in: *Semeia* 1, 1974.
, *Jesus' Parables and the War of Myths*, Fortress, 1982.
 21. Norman Perin, *Jesus and the Language of the Kingdom*, Fortress, 1980 (1976).
 22. Daniel Patte, *What is Structural Exegesis ?*, Fortress, 1976.
 23. Paul Ricoeur, "The Language of Faith / Listening to the Parables of Jesus," in: Charles E.
Reagan and David Stewart (eds.), *The Philosophy of Paul Ricoeur*, Beacon Press, 1978.
 24. Gerhard Sellin, "Allegorie und Gleichnis," in: *ZThK* 75, 1978.
 25. Aurel von Jüchen, *Die Kampfgleichnisse Jesu*, München, 1981.
 26. Wolfgang Harnisch (hrsg.), *Gleichnisse Jesu. Positionen der Auslegung von Adolf Jülicher bis
zur Formgeschichte*, Darmstadt, 1982.
 27. Herman Hendrichx, *The Parables of Jesus*, Harper & Row, 1983.
 28. Hans Weder, *Die Gleichnisse Jesu als Metaphern*, Göttingen, 1984.
 29. Martin Petzoldt, *Gleichnisse Jesu und christliche Dogmatik*, Göttingen, 1984.
 30. Wolfgang Harnisch, *Die Gleichniserzählungen Jesu*, Göttingen, 1985.
 31. Robert W. Funk, Bernard Brandon Scott, James R. Butts,
The Parables of Jesus. Red Letter Edition. The Jesus Seminar, California 1988
 32. Robert Winterhalter with George W. Fisk., *Jesus' Parables. Finding Our God Within*,
Paulist Press, 1993.
 33. William R. Herzog II, *Parables as Subversive Speech*, Westminster / John Knox, 1994.
 34. Eduard Schweizer, *Jesus, das Gleichnis Gottes*, Göttingen, 1996 (1994).